

四万十川中流域窪川町のくらしと音楽

－1990年代の花取り踊りを事例として－

The life and the music in the mid watershed town
of Shimanto River, Kubokawa, Kochi, Japan
－An instance of Hanatori Dance during the 1990's

岩 井 正 浩
Masahiro IWAI

1. はじめに（問題の動機）

1987年、高知県幡多郡西土佐村、十和村の祭り・民俗芸能調査を皮切りに、四万十川上・中流域のくらしと音楽調査を当時の神戸大学民族音楽ゼミナール（岩井正浩ゼミ）^{（註1）}で開始した。その動機は次の通りであった。

かつて人間は自然に畏敬の念を抱き、自然と共生し、くらしを営み豊穡の恵みを享受してきた。しかし、永々と築かれてきたその営みは、人間の側の一時的でしかも一方的な判断によって崩れ落ちつつある。今日における人間と自然のバランス崩壊化現象は、現在の人間に認識されないにしても、スパイラルな発展が瓦解して将来必ず跳ね返ってくるであろう。

人間は様々な形で表出活動を行ってきた。その中でも「音楽」^{（註2）}は、最も原初的な形から芸術的表出に至るまで、人間の重要な表出パターンとして創造され、伝承されてきた。しかし自然と人間の共生、その表出としての「音楽」が伝承されている地域はきわめて少なくなっている。1960年代の高度成長政策で人口の過疎化現象を余儀なくされた地域では、高齢化が急速に進行し、その結果共同体自体の崩壊を引き起こしてきている。高知県は1990年に全国ただ一つの＜人口自然減県＞となり、厳しい過疎化現象の典型的な県となった。さらに高知県内における高知市対地方の構図は、そのまま東京対地方という日本の過密・過疎のミニ版となっていて、文化的にも大きな格差を生み出してきた。地域住民は地域を活性化するに足る地場産業に恵まれず、医療・教育への不安そして嫁不足は、若者の流出現象に拍車をかけ、「音楽」はその担い手・伝承者を失いつつ中断・断絶の瀬戸際に立たされている。

高知県西部四万十川上・中流域の町村もこの例にもれない。住民は展望のある将来を共生してきた四万十川の自然に託し、彼らの物差しで地域の活性化を図ろうとしている。

我々が四万十川上・中流域の町村を研究の対象として設定したのは、以上の問題意識に立脚したからである。

本稿は地域住民のくらしとかかわった音生活＝人間と音楽との関わりを研究する中で、人間にとっての音楽の役割といった命題解明へのアプローチである。調査は、神戸大学教育学部民族音楽ゼミナール（岩井ゼミ）による共同研究に基づき、音楽学的研究は東京芸術大学民族音楽ゼミナールの方法論^(註3)に準拠している。

章立ては1. はじめに、2. 窪川町「農村空間整備構想計画」と民俗芸能、3. 窪川町のくらしの概要、4. 窪川町の花取り踊り、5. 花取り踊りの継承と変容、で構成し1990年代前半期の高知県窪川町の花取り踊りを事例として論述する。高岡郡窪川町は2006年に幡多郡十和村、および大正町と合併して高岡郡四万十町となっているが、町村名は平成の大合併以前の名称を使用する。^(註4)

2. 窪川町「農村空間整備構想計画」と民俗芸能

四万十川は中流の大正町から2手に分かれて遡上している。一つは高岡郡梶原町に向けて北上し、もう一方は南東に迂回し高岡郡窪川町に達しそこから同・大野見村そして同・東津野村へと北上する。窪川町はいわば伊予文化圏から最も離れた地域であり、また海岸部にも接している。その海岸部（興津地区）に四国電力が原子力発電所の設置計画を発表した。そして1980年の「原発設置もあり得る」との当時の町長発言は、原発反対の立場をとる保革を巻き込んだ〈ふるさと会〉の結成へと展開する。その後町議選・町長選での賛否両派の交替勝利をしていく中で、住民の対立は増幅されていくことになる。8年後の1988年、当時の町長が〈原発設置断念宣言〉を発するに至り、8年間も町を分断した闘争は終結した。しかし、長期にわたる闘争が祭りや民俗芸能の上演基盤であるコミュニティの結束に影響を及ぼしたことは否めない。

これに先立って1976年3月、窪川町農村開発整備協議会は、「〈わがさと〉づくりの方向づけ〜」という『窪川町農村空間整備構想計画』を発表した。^(註5)この計画は、1960年代の高度成長政策と1980年代の原発闘争との丁度ばざまに計画されたことに意味がある。つまり、高度成長政策の弊害を克服しこれから住民主体の地域・窪川町を展開しようとした矢先に原発問題が勃発したからである。〈後記〉には本計画の発想理念が述べられている。そこには「窪川町という農村地域〜そもそも山麓の多い山間部、台地を蛇行する河川の流域に開けた平坦部、地域の南面を彩る海岸部、それらによって形成された、ふところの深い、日本の農山村の典型ともいえる地域。…」と窪川町のスタンスを四万十川をはじめとする自然との関わりに置いている。1972年の《計画方針覚え書き》は「この地域を総合的・有機的に把握して、地域の自然のなかに人々が定住し、活動する生活空間として考え、経済的、生態的、風土的なものが相互に関連する計画内容をもつものを、農村空間整備計画として位置付け、それに接近すること」としている。^(註6)《計画の手法》は、①地域を生活空間として捉えること、②我々の生活空間は、本地域の「自然」を基本的な体質としていること、③我々の計画対象は、この農村空間であって、諸機能が複合する多元的な総合体であり、それは、諸種の組織の集合状態を示していること、④我々の志向する地域計画は、農業の論理によって組成されるべきこと、⑤従って、我々はエコロジカルな立場から「地域」にアプローチすること、⑥その領域のなかにおいて、エコノミカルな開発を図ること、⑦地域施策と構

造施策の有機的な統合施策を講ずること、⑧総合的な目標は、人間性の豊かな里づくりであること、⑨地域の価値を高める風土形成のために、社会資本充実の方向を明らかにすること、⑩企画は、その結果により生ずる種々の相関関係を考慮したものであること、の10項を掲げている。^(註7)文化や民俗芸能の捉え方は、全体の構想の中でことさら強調はされていないが、「高原の豊かな清流、たちこめる霧、海辺によせる暖流」〈地域の環境〉、や「歴史的な自治拠点にある地区コミュニティセンターをテコとして、地域の風俗・風習が伝承され、文化的な行事も住民自主によっておこなわれている」〈生活の場〉を《未来の素描》〜〈自然〉と〈連帯〉の風景〜の中で論じている。^(註8)さらに《私的空間の整備》における地域像として、「地域におけるくらしのふしめとしての行事・祭り等、伝承すべき歴史的な文化・風習を見直し、伝統的なコミュニケーションを近代的に復活すること」^(註9)とし、伝統文化の近代的復活を目途している。

本計画の事務局長であった市川和男は「窪川町農村空間整備計画序説・補論」〈住みつく里の文明的意味を求めて〉の中で、基本的理念の補足を試みている。この中で本計画を「地域の定住者が峠道で語り合う思想を掘り起こしながら、自分たちが住みつき、次代に誇りを以て譲渡できる農村風景への道を求めたパイロット・プランです。それは、地域に自生した発想を種子としており、その種子をすこやかに育て上げてゆく理念的な方向づけを主眼とするものです。」^(註10)と、あくまでも地域定住者がすべてにおいて主体であり続けることを重視し、基本的なスタンスとしている。

また総論的骨子の中で〈豊かさの定義〉を「農村にとって、真の豊かさとは、自然と人間のかかわり合いの調和的発展を定着させることである。」とし、〈地域の定義〉を「自然と人間のかかわりの歴史的空間であり、人間と人間のかかわり合う社会的空間であり、それが地域の相となった風土的空間である。そして地域特有の生活の足跡としての文化があり、その上に創造的な未来空間がデッサンされるべき、総合体としての生活空間である。」^(註11)としている。

農村＝地域が主体であるとは、〈ケ〉が基本的に機能していないところに〈ハレ〉はありえないし、あってはならないということである。幡多郡十和村の「四万十川まつり」があくまでも地域住民を主体とし、都会からマレビトを招聘しつつも地域住民のための祭りであり、地域を軸とした情報発進と受信を行なおうとしているスタンスと合い通じる。都会人のためのリゾート地化した地域は、もはや地域住民のための地域ではない。そこには地域住民の主体的な営みが二次的・三次的意味しか持たず、地域のプライドは音をたてて崩れていくであろう。その結果すべてが大都市＝東京一極集中化の弊害をより一層促進していくことになる。これは米軍基地をかかえる沖縄の風景と重なってくる。つまり地域住民の命運が都会人や米軍の存在に委ねられてしまっているからである。

市川はさらに「ハレをのみなつかしみ、ケの存在を無視したふるさとの安売りが商業主義に横行し（例えば今日の民謡ブームは、農政とうらはらのものです）、都市のエゴとしてしか映らぬふるさと論（地方への移住政策）がみられ、かつその流れに便乗した短絡的で表層的な経済開発がとりざたされるとき、この歴史的な土着の論理と無関係な、単なるハレの復活はナンセンスなお祭さわぎにしかすぎず、むしろ有害なものとなるのは自明です。」^(註12)と述べている。これは地

域定住民の日常生活の中から必然的に生成する文化現象の持つ意味の再評価であり、地域定住民主体地域論の展開である。

高度成長政策の結果、地域破壊の荒波の中でこの計画を立案した窪川町民は、原発問題で再び荒波の洗礼を受けることとなった。それは地域の発展を原発に委ねようとする発想と、地域の主体的な地力を復興させようとする発想のせめぎあいでもあった。本計画が今日的意味を持ちながらも、そこには何が重要で譲れないものであるか、またその理念は日本ばかりではなく地球規模の基本的理念としての意味、つまり地方発信の日本および地球規模の未来への提言とみることができるのである。たかが〈民俗芸能〉だと思われる地域活動も、地域教育力のバロメーターとしての存在感を持ち、住民生活の〈ケ〉との有機的結びつきとしての〈ハレ〉の意味を持ち、住民主体の地域づくりの重要な一翼を担っているのである。

3. 窪川町の暮らしの概要^(註13)

3-1 1990年代の地勢・人口

旧窪川町は高知市より西方65キロメートルに位置し、総面積の82.7%を森林・原野が占め、農地は10%、そのうち90%が水田である。(この水田率は高知県第1位)

人口は1992(平成4)年10月現在で16,804人、世帯数6,289戸である。人口推移は1955年前後をピークとし、1965年までの10年間に20%減少している。本項では窪川町沿岸部の志和と興津も窪川町ということで四万十川流域に含めて論じる。

3-2 産業

産業別就業構造は、1960年を境に第一次産業が大幅に減少、一方第二次産業は1970年を底に増加に転化、第三次産業も1965年を底に増加に転じた。1990年には農業が28.5%で最も多く、ついでサービス業18.0%、卸・小売業16.2%、製造業15.0%、建設業9.8%、運輸通信業3.6%、漁業水産養殖業2.4%。林業・狩猟行1.4%などとなっている。

窪川町は高知県下でも有数の米作地帯として知られているが、その形態は年々変化してきている。戦前は稲作単作であったが、戦後は畜産・園芸が振興されたため稲作との複合経営が一般的になり畜産は主要な産業となった。

3-3 信仰

30の村社と50の無格社が存在し、その中心的存在が高岡神社である。伊予から移住してきた河野氏^(註14)の一族がその氏神を祭ったものが起源だが確かな創建年は不明。826年に弘法大師が高岡神社の右脇寺である福円満寺を創建するがこの時、五社に分けて祭られるようになり河野氏の先祖に当たる祭神が祭られた。これが「五社大明神」の起源で、戦国時代には「仁井田五人衆」^(註15)と呼ばれる豪族たちの崇敬神として信仰された。

毎年9月にはそれぞれの代表が出て穀物を捧げ、五神神幸の行列が行われた。流鏑馬や宮相撲も行われる大規模な例祭があり、特に3年に1度の「みふね年」には五宮の神輿を乗せた大神幸が長宗我部時代まで続き、その出発港が志和であった。その後、明治初期の廃仏毀釈で高岡神社と改称され県社となっている。仏寺は廃仏毀釈でほとんどがその姿を消した。前述の福円満寺は四

国霊場第三七番札所である岩本寺の前身で、1889（明治22）年に再興された。

3-4 1990年代の窪川町の各集落概要

本項では平成の大合併以前の町村名を用いて概要を論じる。

3-4-1：旧窪川町（野地、見付、秋丸、家地川、若井、桧生原）^{（註16）}

旧窪川町は現在の窪川町西部に位置し、渡川（四万十川）と仁井田川の合流点である南側地域（「街分」と呼ばれる）は古くからの中心地で、土佐藩家老山内氏の居城である土居屋敷の城下町として繁栄した。また四国八十八か所霊場三七番札所岩本寺があり、遍路道としても発達を促した。1951年に開通した土讃線はターミナルとしての役割を担ってきた。

この地域の人口は窪川町全体の3分の1を占め、1960年代以降の高度成長政策による人口流出も、近年では周辺農村部からの流入で増加傾向が見えている。若井川では全国的に注目されている産地酪農が、辺地集落である家地川では青年団が活発な「地域おこし活動」を行っている。

3-4-2：旧松葉川村（川奥）

窪川町の北部、渡川・日野地川の各集落が点在し農家が過半数を占める山村である。この地域の最奥部である森ヶ内集落には1908（明治41）年に営林署が設置され、下呉地（旧仁井田村）まで17キロメートルにわたる森林軌道が敷設され天然林伐採が行われた。担い手は四国出身農家の二・三男が多く、独立したコミュニティを形成していたと言われている。^{（註17）}

3-4-3：旧仁井田村（影野、替坂本）

窪川町東北部、仁井田川流域に位置し比較的平坦地が多く、水田稲作農耕が行われブランド米「仁井田米」を産出している。かつては＜結＞による共同労働が存在していたが近年の減反政策で、転作作物としてのショウガ栽培が多くなり、その作付面積は全国一となっている。

3-4-4：旧東又村（志和）

この地区は四万十川流域ではなく沿岸部東部に位置し、東又川と大井川の各流域に集落が点在し、水田稲作と養豚が盛んである。志和浦分には江戸時代以繁栄した志和港があり、土佐藩の年貢米の積み出し港として、明治中期以降は高知と宿毛（高知県西部）を結ぶ沿岸汽船の寄港地として重要な交通の要衝でもあった。当時は木炭や米を移出し、日用品雑貨を移入し＜街分＞へ運ばれた。漁業組合は1902（明治35）年設立され、かつては大敷網（定置網）による鰯漁で賑わった。

3-4-5：旧興津村（興津）

旧興津村も沿岸部の窪川町南東半島部に位置し、浦分は志和と同様に漁業組合が1902年に設立され大敷網による鰯漁で賑わった。郷分の水田は塩分が多い湿田であったが土地改良されている。気候は温暖でピーマンなどの施設園芸が行われている。

4. 窪川町の花取り踊り

4-1 花取り踊りの起源と名称

花取り踊りに関しては、神戸大学大学院修士論文で川井伸子が『花取り踊りにおける伝承の諸相～高知県四万十川流域 特に十和村を中心に』を1989年度に提出している。また先行研究とし

ては幡多郡十和村が1977年に『十和の民俗上・下』、高木啓夫が1986年に『土佐の芸能』の中で「花取踊り」、『土佐の祭り』(1992年)で祭りの中での花取り踊りを紹介している。さらに『高知県史』および『高知県史 民俗資料編』には花取り踊りについての記述がある。^(註18)

花取り踊りは四万十川流域だけではなく高知県全域で伝承されている。名称としては他に「花跳び踊り」「太刀踊り」「花鳥踊り」「庭はらい」などがある。神戸大学民族音楽ゼミナールは窪川町のくらしと音楽調査に基づく論文、報告書を著してきた。(表1) その中でも窪川地区の花取り踊りに注目したのは、中断、廃絶した地区もあるが他市町村に比べ数多くの地区で花取り踊りが踊られてきていることによる。見付部落の林一将(かつまさ)氏は花取り踊りの由来について「当部落には古来から伝統ある古典芸能として此の花取踊が続けられてきたものである。しかし、この踊がいつの頃からどのような理由で始められたものか詳でない。」として『老圃奇談』^(註19)からの引用に続けて次のように語っている。この一説は「昔の戦勝の祝武運長久、非業の死を遂げた武士供養のために神社に踊を奉納したものであろうか。更に百姓たちは“部落の豊作御礼と追善供養、厄除祈願の護願解きのため”に氏神様の前で花やかで勇壮なこの踊を神前に奉納したものではないか。更に花取城という堅固の守りの城を攻めあぐんでいた敵将が一計を策し、兵士が刀を隠して皆太鼓を打ち鳴らして踊を乱舞し、これに気をとられているうちに一きょに城内に攻め入り見事に城を落した。この賑やかさに誘われて出て来た敵将の鼻を切り取って殺したので“はなとり”踊りとなったという説もあり、とあるところから高岡郡一円を収めていた津野氏の時代の頃即ち、天文年間ではなかろうかと推察すれば四五〇年から五〇〇年の昔からではなかろうか。(中略)大正、昭和の代となり荒廃した戦後も当時の青年たちの郷土愛の精神で続けられ、(中略)津野充宏らの踊り子を最後として昭和三十二年以来中止され現在に至っている。」と述べている。^(註20)

林一将氏はさらに、林弥助氏が踊った昔を思い出してもらった14の花取踊の種類を、また大正時代に踊り子として勤めた横田国吉氏が覚えていた16編の歌詞を書き留めている。

これは花取り踊りについての諸説のひとつであるが、『土佐海続編鈔』には、「花取地舞」として、「花鳥おとりハ真剣をぬきもちて踊る。鎌を以て踊るもあれど、諸村然るにあらず。此地舞ハ、幡多郡川登郷塩塚村諏訪大明神の祭礼に踊りはじめて、一国中に弘まるといふ。此社ハ敷地藤安の□を祭る事ハ、絵馬歌おどりハ天下一、楠島のおかね云々の条に註す。」としている。^(註21)津野は津野文化圏であり幡多郡ともども四万十川流域に位置していて、名称や起源は異なるが、踊りとして四万十川流域で踊られていたことを物語っている。

4-2 窪川町各地区の花取り踊り(巻末写真1-8)

神戸大学民族音楽ゼミナール(岩井正浩ゼミ)は、窪川町で1990年5月から1995年11月にかけて20回の調査を実施している。表2は神戸大学民族音楽ゼミナールの調査日誌である。調査者は神戸大学学部学生、大学院生、他学部学生、他大学学生など音楽、民俗学、社会学、教育学など多種多様な専攻で構成されていた。

窪川関連の論文や報告書は表1の7、8、9、11である。ただ、調査済だが論文や報告書に記されていない研究も残っており、今後の通時的調査を踏まえた研究が課題としてある。本稿では曲

節の論考は紙面の都合上次の機会に譲る。

以下は各地区の花取り踊りの特徴の比較である。

ここでは窪川町替坂本、家地川、見付、影野、秋丸、川奥、野地、桧生原、志和、若井、興津の各地区における①歌、②楽器、③隊形、④履物、⑤衣装、⑥注連縄切り、⑦担い手、⑧呼称、⑨採り物、⑩人数、⑪踊り場について考察する。なお替坂本は1992年現在、担い手不足で中断していたため練習を調査風景を調査した。また影野は1983年「窪川町民俗芸能大会」におけるステージ上での踊りである。

①歌＝全ての地区で歌われている。

②楽器＝鉦打太鼓は据え付けで基本的には踊り場の外、締太鼓は踊り手が持って打つ。

③隊形＝二列縦隊、円型および前後左右への移動など。

④履物＝地面の場合は草履、ムシロを敷いている場合は裸足または足袋

⑤衣装＝頭部は鉢巻が多いが、替坂本、見付、影野、秋丸、川奥（以前）、若井は烏毛を、さらに見付、若井は烏帽子を付ける。衣装は袴が多く、後ろに美しい帯をたらしめたタツツケ（タクリと呼称）を付ける。鉢巻に関しては以前には烏毛や烏帽子を付けていた可能性もあり、今後の調査の課題である。

⑥注連縄はほとんどの地区で四方に張り、その中で踊るが、野地と川奥にはない。またこの注連縄を切ることで結界を取る行為は、替坂本、影野、桧生原、志和、若井（以前）で行われていた。

⑦担い手＝子どもと大人は替坂本、家地川、見付、桧生原、若井で、さらに女子が入っているのは影野、野地、志和、そして秋丸には中高生も入っている。女子の参加は子どもの減少が要因である。本来「担い手」は「男」であると回答している。

⑧呼称＝全ての地区で「花取り」と呼んでいる・志和の「花」は出陣を意味している。

⑨採り物＝太刀踊りとも呼称されるだけあり、大小の太刀を用いる。また鎌を若井と興津（以前）が用いている。基本的に大太刀は大人、小太刀は子どもである。

⑩人数＝10名前後が多いが、秋丸のように子ども→大人と交代で踊る地区もある。

⑪踊り場＝a) 境内にムシロを敷いて踊るのは替坂本、家地川、見付、影野、桧生原、b) 境内の地面の上では～秋丸、若井、興津、c) 境内と公民館前では川奥、d) 神社横の公民館の庭では野地、そして e) 境内と浜では志和が踊っている。公民館前や庭での踊りも以前は境内であった可能性がある。

4-3 歌詞に見られる特徴

窪川の花取り踊り歌には、他地区では見られない特徴がある。それは五七七四の詩型で歌われることである。調査で提供していただいた歌詞を見渡しても、少しの字余りがあるにせよ基本的には五七七四の詩型で構成されている。

この五七七四詩型は田植歌と共通している。中でも仁井田地区は昔から囃子田が盛んで、大正時代まで行われていたことや、五七七四の詩型の田植歌は囃子田として歌われた可能性がある。『窪川町史』には次のような記述がある。

仁井田郷五千石の地は、何といっても田所米所で、今から約三百年以前、藩政時代から土地はしだいに開墾され米作が進んだ。(中略) 仁井田郷の村に「囃子田」というのがある。また「太鼓田」ともいう。田植はよそと違って、稲を刈って翌年植えるまで田をそのままにしておく。稲を植える前に田をすいて直ちに苗を植える。およそ一田に早乙女七八十人より三十人ほどして植える。はなはだにぎやかなことである。タチウド一人、太鼓打二人、ササラスリ二人、つまり太鼓を打って田植歌を歌いながらにぎやかに田を植えるのである。(中略) この太鼓田は、江戸時代から明治時代を通り抜けて、大正の初期まで伝わっていた。(中略) 大正の初めごろに歌った田植歌は山歌と切り歌の二通りがあって、この歌は現在六十歳以上の人は知っていると思う。

として田植歌を紹介している。(「山歌」より抜粋)

あの山は親の立山見上げて見ればなつかし
 友達はどううつけ卯の花咲いての後は散りぢり
 追いつけや後の子遍路仁井田の五社で待ちよる
 大野見のこぶが瀬にこそやよ玉草が浮きよる
 玉草を八重に包んで流すぞ下の瀬で取れ
 瀬で取りて開いて見たれば石より堅い約束
 恋しくば尋ね来て見よ篠田が森の葛の葉
 窪川の土居の前を流るる水はよい水
 よい酒に菊を散らして思う酌で飲まいで
 なれなすび背戸の小なすびならねば嫁の名が立つ^(註22)

これらの歌詞がいかに窪川の花取り踊りの歌詞に反映しているかは比較すると明らかとなる。

次の歌は調査で提供いただいた花取り踊り歌の歌詞である。

志和峯「なれなすび背戸の小なすびならねば嫁の名が立つ」
 替坂本「よい酒に菊を散らして想婦の酌で飲まいで」
 琴平神社「その浮草を八重に結んで流すぞおん下の瀬で取れ」
 東見付「大野見のこぶが瀬にこそやよ玉草が浮きよる」
 川奥 「窪川の土居の前を流れる水はよい酒」
 志和 「おいつけよあとの子へんろよ 仁井田の五社で待ちよる」
 若井 「良けれども悪き名がたつただ悪ければ嫁御ぜ」
 桧生原「友だちはうつけ卯の花咲いたる後は散りぢり」

双方を照合すると、田植歌の歌詞がそのまま花取り踊りで歌われていることが明らかである。

町田嘉章は『日本民謡大観四国篇』の「民謡採集の回顧」で2種の田植歌を五七七四調という七七五調以前の古調として紹介している。

追いつけや後の御遍路、仁井田の五社で待ちよる

若しそれが違う時は、足摺さんで待ちよる^(註23)

お遍路たちは、この五社(前述。3-3. 信仰)のある窪川の第三七番札所岩本寺を過ぎると足

摺岬の第三八番札所金剛福寺まで長い道のりを歩くことになる。その光景が鮮やかに歌い込まれている。

町田はさらに四国の「囃子田」系歌謡として、窪川町の田植歌について、E型（詞型五七七四）に属するとし、さらに「特に高知懸高岡郡窪川町仁井田周辺のもは、独特な味を持つ曲節となっている。」と記している。^(註24)

また『高知県史 民俗資料編』に「高岡郡仁井田郷中のはやし田」の記述がある。

高岡郡仁井田郷中に、はやし田うへあり。他郷にハなし。(中略) 早乙女は皆笠を戴き、歌謡ひて植ゆ。又太鼓打チあり。

として朝・昼・晩の歌を掲載している。その中の一首

朝声を ならせ ――― ならさぬ声ハ 寝声や^(註25)

五七七詞型に関する研究は、その後上西律子によって深化されている、上西は「五七七四詞型田歌の音楽的特徴」で、中国、四国地方での事例を紹介し仁井田地区の田植歌が同じ形で歌われることを明らかにしている。^(註26) 上西はさらに「五七七四詞型田歌と七七四詞型田歌－歌の掛け合い方から比較できること」の中で、五七七四詞型田歌に関しては3点を挙げている。(合計4点)

- ①五七七四詞型田歌の詞章の多くは掛け歌になっており、交互唱で歌われることが多い。
- ②掛け合いのパターンは五七と歌って七四と返すものと、五七七四と歌って五七七四と返すものの、またその間にハヤシが入るものなどがある。
- ④五七七四詞型田歌と七七四詞型田歌は、どちらも儀礼的・神事的役割を担った役歌（大歌）の間に挟み込まれるように、小歌として歌われる。またどちらも、囃し田歌の中に組み込まれず単独で歌われることがある。^(註27)

これら五七七四の詩型の田植歌は四万十川上流域にも見受けられる。上流域に位置する東津野村の田植歌に、

春咲くは うつけ卯の花 五月に咲くは 片白

梶原町松原の花取り踊りで、

俺共は 初の花取り 悪くと良いと 押し出せ

と歌われており、四万十川中流域窪川町を起点として上流地域に五七七四の詩型の田植歌が分布していると考えられる。

次に歌詞の中に「なむあ（お）みどうや」が含まれていることも注目に値する。現在、神社で奉納されている花取り踊りは、元来神事芸能からではなく盆に関係した踊りであったとも言える。高木啓夫は「盆と花取り踊り」の中で次のように述べている。

「太刀踊り乃至花取り踊りが単一の芸能でなかったことを示している。つまり盆踊りの一種目であったと思われるのである。そして鉦が叩かれ、踊りはじめの足揃えと称する所作で「南無阿弥陀仏」と唱和するのは、やはり念仏系の芸能であることを示している。」^(註28) 窪川町の花取り踊りの歌詞の中にも「なむあ（お）みどうや」や「精進」と歌われる地区がいくつかある。

志和峯 ：一つ切り：花取りは七日お精進で汚すな村の若い衆

替坂本 ：花取りは七日ショウジぞ けがすな村の若い衆

琴平神社：花取りは七日精進で 汚すな本村の若い衆

秋丸 : 南無おみどうよ南無おみどうよ、合せ刀よ、両手合せやよう。

「太鼓や歌よいや花取り花取り」南無おみどうよ。

東見付 : 西寺の東花だんの あをいの花となり度い

志和 : 花取りは七日精進ぞよ けがすな村の若い衆

若井 : 花取りわ七日精進(しょじ)て穢すな村の若い衆

※第5、13の歌詞に「念仏なし」の記載

五七七四の詩型の田植歌は、終わりの句(4字)を受け継いで歌っていることで問答歌、さらには歌垣としての位置づけも可能であろう。

花取り踊りは、地域住民たちによって盆の念仏系統の踊りから秋祭りに移行させ、構成員や日程の変容を寛容させてきた。それは主体としての神事的表出から風流として<見せる>芸能としての側面を次第に強め、五穀豊穡への感謝、神祭への中に位置づけてきたとも考えられる。そうすることで直会→饗宴へと続く秋祭りの総合性を追求し、1年の区切りと翌年への予祝を行うパフォーマンスの場としてきたのではないだろうか。

5. 花取り踊りの継承と変容：高知新聞に見る窪川町の芸能と花取り踊りの変遷

表4は1970年代から2010年代にかけて高知新聞紙上に掲載された記事である。過疎化が進行していく中で地域住民はコミュニティの存続を祭りに託し、いくつかの祭りや花取り踊りの復活を行ってきている。しかし人手不足対策としての他地域からの応援人の募集などには並々ならぬ苦労と努力が見て取れる。本稿で論じた窪川町11地区の花取り踊りも、替坂本は30年ほど前に、また影野は10年ほど前から担い手不足で花取り踊りを実施できていない。さらに高知県の無形文化財に指定されている川奥の花取り踊りは、後継者がいなくなり存続が難しいので指定の取り下げを願い出ているということである。^(註29)

川との共生がいかに地域住民にとって重要であったかは、高知新聞における記事に現われている。(表3)1980年代から一貫して紙上に掲載されたのは<清流四万十川>、<水質保全>そして<ふるさと創生・活性化>であった。

1960年代の高度成長政策、それに続く高度情報化、地域を二分して争われた原発設置問題は窪川町にとって苦難の歴史でもあった。筆者は18年前の1994年に「四万十川上・中流域のくらしと音楽序説」の中で次のように論じたが、現代におけるTPP問題や福島原発事故は当時の窪川町の状況と重なって脳裏をよぎる。

人口の大都市集中化と極度に発達した情報化社会は、伝統的な生活様式や言語生活、年中行事や信仰・遊びを崩壊させつつある。(中略)原子力発電所の設置も、東京をはじめとする大都市住民のため、遠い地域住民の生活と環境を犠牲にしかねない発想で行われている。原子力発電所が安全であれば、遠く離れた地域ではなく当然大都市近郊に設置されてしかるべきだと考えられるからである。要するに地域住民は伝統文化を破壊され、一方では大都市の文化を送り込まれ、貿易自由化のもと地場産業の破たんが進行し、さらに原子力発電所や

ゴミ投棄などの犠牲を強いられるという弱者の立場に立たされている。^(註30)

1990年代前半期における窪川町の花取り踊りを事例として四万十川中流域のくらしと音楽について論述してきた。窪川町をはじめとする四万十川地域は、他地区におとらずコミュニティ崩壊の危機に直面している。祭りや民俗芸能は、コミュニティをつなぐ大きな核でもあった。1990年代から20年経過した現在、住民のくらしと祭り、花取り踊りがどのような状況にあるか、通時的調査を行うことが必要である。

本稿作成にあたっては、1990年代に調査にご協力いただいた林一将氏をはじめとする窪川町各地区の方々、高瀬満伸四万十町長および商工観光課職員の皆様方に御礼申し上げます。

註釈

1. 1987年結成。神戸大学教育学部岩井研究室における日本及び諸外国の民族音楽の調査・研究を主たる目的とするゼミナール。今日まで、四万十川関連以外に、香川県の「滝宮念仏踊」の調査・研究による『滝宮念仏踊－その音楽と構成』（全4編。神戸大学教育学部研究集録1988-1990年）、や淡路島民俗音楽調査の実施をはじめ、人間と音楽との関わりに関する研究成果の発表を行なってきた。
2. 本稿のタイトル及び括弧付きの「音楽」は、民俗芸能を含む概念である。
3. 東京芸術大学民俗音楽ゼミナールは、東京のわらべうた調査の結果を『わらべうたの研究 研究編・楽譜編』（小泉文夫編著 1969年）で発表、さらに沖縄調査では「沖縄音楽研究申し合せ事項集」で1975年に方法論を作成している。なお後年になって東京芸術大学民族音楽ゼミナールとして、民俗を民族に改定している。
4. 高岡郡四万十町は東から西に流れる四万十川中流域にあり、東南部は土佐湾に面している。総面積642.06平方キロメートルで林野が87.1%、田畑は4.8%、人口は19,354人（2012年2月1日現在）となっている。東部に位置する旧窪川町は中央部を南流する四万十川流域の標高320メートルの高南台地に位置し、約2,000 haの農地が広がっている。
(四万十町プロフィール <https://www.town.shimanto.lg.jp/info/outline.php>)
5. 窪川町農村開発整備協議会 1976.3
6. ibid., 《計画方針覚書》 p.165
7. ibid., 《計画の手法》 pp.29-33
8. ibid., 《未来への素描》 pp.39-43
9. ibid., 《私的空間の整備》 p.97
10. 窪川町農村開発整備協議会 1979.3 p.7
11. ibid., 《計画の構想》 pp.11-12
12. ibid., 《自治・風俗》 pp.68-69
13. 詳細は「四万十川上・中流域のくらしと音楽 [IV]」1993年(表1) 参照
14. 愛媛県大三島を本拠地とした豪族。武士集団として地方勢力を確立するに至り、中世に栄え

たが、戦国時代、豊臣秀吉の武将、小早川隆景によって滅ぼされた。(野口光敏『日本の民俗 愛媛』第一法規 1973年 pp.23-25)

15. 『史談くぼかわ』で佐々木馬吉は「長宗我部地検帳では、窪川町は仁井田郷と称されるとともに(中略)長宗我部元親は、土佐統一、四国統一という過程で戦国期的秩序として「〇〇衆」と呼ばれる組織を、軍制、職制あるいは地方組織の単位として作っている。(中略)窪川七郎兵衛宣秋、西原紀伊守貞清、志和権之助宗茂、東助兵衛宗隆、西和泉守宗勝らの仁井田郷の領主たちが、天正十一年当時の仁井田五人衆と言われた人々である。」と論じている。(第8号「仁井田五人衆特集号」 窪川史談会 1987年 pp.11-14)
16. 括弧内の地区は後出4章における花取り踊りの所在地
17. 職員増加によって1914年に家庭教育場(後の松葉川小学校)が設置され、1974年の廃校まで営林署職員子弟の教育が行われた
18. 『高知県史 民俗編』 1978年 高知県／『高知県史 民俗資料編』 高知県1977年
19. 『老圃奇談』に「花取踊」として、「当国山分の風俗ニて、祭日の時花取踊と云事有。氏子集りて真劔を抜連、大鞆(鼓)をならし夫を拍子に踊る也。初ハ静ニして次第に甚早くなる。拍子ちかふ時は害有、あやうき踊也。里人云、昔津野孫次郎吉良駿河守を攻る時、祭ニ事寄城を乗取りしより初となり。高岡郡須崎と云所に津野祭とて九月廿九日祭有。其式此踊也。元是より始る。(高知県史民俗資料編 p.527所収)
20. 1979年 林一将氏メモ書き「見付花取踊の由来」)
21. 「花取地舞」、『土佐海統編鈔』。(高知県史 民俗資料編 p.492所収)
22. 「仁井田郷の田植」『窪川町史』 窪川町 1970年 pp.119-124
23. 『日本民謡大観四国篇』日本放送協会 1973年 p.466
24. ibid., p.467
25. 『高知県史 民俗資料編』 高知県 1977年 p.495
26. 『民俗音楽研究』19号 1996年 pp.65-75
27. 『民俗音楽研究』28号 2003年 p.16
28. 『高知県史 民俗編』 高知県 1978年 p.472
29. 高知県高岡郡四万十町商工観光課での聞き取り 2012年2月27日
30. 『日本の音の文化』 第一書房 1994年 pp.238-239

表1 「四万十川関連論文・報告書」 作成：岩井正浩

1. 「花取り踊りにおける伝承の諸相～高知県四万十川流域 特に十和村を中心に」(川井伸子) 神戸大学大学院教育学研究科修士論文 1989年度
2. 「村おこしと民俗芸能」(岩井正浩) 『民族音楽叢書 No.10』 東京書籍 1991.6
3. 「地域文化の伝承と創造～十和村『四万十川まつり』にみる伝統の継承」(岩井正浩) 『音楽教育学の展望Ⅱ・上』音楽之友社 1991.8
4. 「四万十川上・中流域のくらしと音楽－Ⅰ 高知県幡多郡十和村大道地区」 神戸大学教育学部研究集録 第87集 1991.10 岩井正浩、アルバレス・ホセ、岡部芳広、黒田彩子、寺井智子、槇田盤、松本邦裕
5. 「四万十川上・中流域のくらしと音楽－Ⅱ 高知県幡多郡大正町下津井」 神戸大学教育学部研究集録 第88集 1992.3 岩井正浩、アルバレス・ホセ、岡部芳広、黒田彩子、寺井智子、槇田盤、桜井寛
6. 「四万十川上・中流域のくらしと音楽－Ⅲ 高知県高岡郡梶原町松原」 神戸大学教育学部研究集録 第90集〔最終号〕1993.3 岩井正浩、樋口昭、桜井寛、黒田晴子、藤井千尋、川本友子、大塚由貴子、松本佳久子
7. 高度情報化に伴う民俗音楽・民俗芸能の均質化と変容 放送文化基金研究報告－16 1993.3。岩井正浩・神戸大学民族音楽ゼミナール
8. 「窪川町志和の秋祭り」 民俗音楽研究－13 1993.3 岩井正浩、上西律子、川内由子
9. 「四万十川上・中流域のくらしと音楽－Ⅳ 高知県高岡郡窪川町①」 神戸大学発達科学部研究紀要1-1〔創刊号〕1993.9 岩井正浩、上西律子、槇田盤、川本友子、大塚由貴子、松本佳久子、藤川順子、中野伸一、大西賢太郎
10. 「四万十川上・中流域のくらしと音楽序説」(岩井正浩) 『日本の音の文化』 第一書房 1994.3
11. 「四万十川上・中流域のくらしと音楽－Ⅴ 高知県高岡郡窪川町②」 神戸大学発達科学部研究紀要 2-2 1995.3 岩井正浩、上西律子、黒田晴子、川本友子
12. 「四万十川上・中流域のくらしと音楽－Ⅵ 高知県幡多郡西土佐村半家」 神戸大学発達科学部研究紀要 3-1 1995.9 岩井正浩、坂井康子、上西律子、桜井 寛、篠原真紀子
13. 「四万十川上・中流域のくらしと音楽－Ⅶ 高知県幡多郡西土佐村藤ノ川」 神戸大学発達科学部研究紀要 3-2 1996.3 岩井正浩、坂井康子、上西律子、桜井 寛、篠原真紀子
14. 津野山神楽(高知県梶原町) 1996.3 神戸大学発達科学部人間行動表現学科音楽表現論コース。 1995年度「民族音楽調査論」報告書
15. 「四万十川上・中流域のくらしと音楽－Ⅷ 高知県高岡郡東津野村①」 神戸大学発達科学部研究紀要 4-1 1996.9 岩井正浩、アルバレス・ホセ、大西賢太郎、北見真智子

表2 「窪川町調査日誌」 作成：岩井正浩

(調査地=窪川町となっているのは、窪川町内における聞き取り・文献調査の意)

[日程]	[調査地]	[調査者]
1990. 5/31-6/1	窪川町	岩井正浩
11/20	窪川町	アルバレス・ホセ、寺井智子、松本邦裕、久保正美
1992.10/23	秋丸	守谷文二郎
10/27-30	志和	岩井正浩・上西律子、藤川順子、松本佳久子、中野伸一、 守谷文二郎
10/31	家地川	岩井正浩、槇田 盤、川本友子、川内由子、大塚由貴子
11/1	若井	岩井正浩、槇田 盤、川本友子、川内由子、大塚由貴子
11/3	檜生原	槇田 盤、川本友子、川内由子、大塚由貴子
12/29	窪川町	岩井正浩
1993. 6/3-6	窪川町	大西賢太郎
2009/11/12	川奥	岩井正浩、黒田晴子
10/15-16	興津	岩井正浩、黒田晴子、川内由子、齊藤 浩
10/15-16	榊山	黒田晴子
10/31-11/1	若井	岩井正浩、黒田晴子、樋口 昭、川本友子、大西賢太郎、 株本真里
11/1	秋丸	黒田晴子
11/1	野地	岩井正浩、黒田晴子、樋口 昭
1994.10/22-23	秋丸	桜井 寛、古庵晶子
11/1/2	若井	桜井 寛、植村浩之
11/4/6	黒石・与津地・影野・弘見・ 替坂本・土居	岩井正浩、桜井 寛
11/6/7	見付：宵祭り・練習/神祭	岩井正浩、桜井 寛
1995. 11/24-25	窪川町	岩井正浩、アルバレス・ホセ
2012. 2/13	窪川町	岩井正浩

表3 [高知新聞に見る四万十川中流域窪川町の芸能・花取り踊りの変遷] 作成：岩井正浩

[70年代]

77. 11. 8	窪川町若井地区秋祭り：300年余の伝統健在。ことしも花取り踊り披露
77. 11. 16	東津野村高野三嶋神社：21年ぶり高野の回り舞台。「三番叟」など4幕。
78. 8. 8	窪川町松葉川：盆踊り「こっば」
78. 8. 18	窪川町松葉川：盆の送り火
78. 10. 19	窪川町河内神社：おなばれも10数年ぶりに復活
78. 11. 13	窪川町数家：奇祭だいく様
79. 10. 30	窪川町志和：伝統の「おんや踊り」奉納。志和の神祭にぎわう

[80年代]

80. 10. 24	窪川町影野の六十余社大祭：32年ぶり花取り踊り 小中学生を特訓
80. 11. 1	窪川町東又：お伊勢踊り30年ぶり復活。三熊野神社に奉納
83. 10. 10	窪川町興津八幡宮大祭：みこしと宮舟攻防戦。原発で中断3年ぶり復活
88. 9. 5	窪川町川奥：花取り踊り
88. 10. 19	窪川町・河内神社の秋祭り：“おなばれ”も復活、十数年ぶりのにぎわい
88. 10. 26	窪川町桧生原地区：花取り踊りに時代の波。過疎化で人手不足。女子児童も参加
88. 11. 4	窪川町桧生原：花取り踊り継承。女子も立派に初舞台

[90年代]

92. 3. 8	窪川町川高校：6年間の成果を製本。四万十川流域文化を学習。原発問題や朝鮮人連行も。
92. 9. 2	四万十川の民俗音楽 研究続行に支援を 神戸大グループが資金難
92. 11. 1	四万十流域で神戸大ゼミ 民俗芸能や神祭を調査
92. 11. 18	窪川町志和：郷土芸能保存気運高まる。志和では田植え歌を勉強
92. 11. 26	窪川保健所の職員：四万十川保全へ手作りビデオ
94. 11. 6	窪川町志和小：全校参加の神祭 児童が踊り手、地域と一体。花取り踊り、棒打ち、青年団が指導
96. 11. 25	窪川町：本殿再建 3年ぶり神祭。台風で被害の琴平神社。久々みこし街に活気
97. 7. 8	窪川町口神ノ川：女性だけの七夕祭り。100年の伝統受け継いで
97. 11. 10	窪川町仕出原：祭りの銅矛。暴れ川の鎮圧を祈る（「四万十有情」）
99. 10. 16	窪川町興津八幡宮：神輿、宮舟、流鏝馬、花取り踊り

[00年代]

00. 10. 16	窪川町興津：宮舟とみこし 激しく攻防
00. 11. 23	窪川町若井川：花取り踊り、お年寄りの言葉で若井川小児童が復活
02. 9. 27	窪川町興津八幡宮・宮舟神事：担ぎ手不足でピンチ・地区外からも募集
02. 10. 14	窪川町興津八幡宮：宮舟とみこし激しく攻防戦。島外からも300人
06. 9. 28	四万十川町興津八幡宮：宮舟神事に参加を。担ぎ手50人募集（窪川町は「四万十町に改称」）
06. 10. 16	四万十川町興津八幡宮：担ぎ手不足“宮舟対決”ならず
07. 10. 17	四万十川町興津八幡宮：海でみこしお清め。来年こそ宮舟を
08. 8. 16	四万十町土居若井地区：15年ぶりに「むかえ火」復活
08. 10. 16	四万十川町興津八幡宮：宮舟神事3年ぶり復活。農林水産省の補助で地区外から担ぎ手40人。 （交代要員含めると70人必要）
09. 10. 16	四万十町興津八幡宮：花台7年ぶり復活

[10年代]

10. 10. 16	四万十町興津八幡宮：宮舟神事に歓声。流鏝馬、花取り
11. 10. 16	四万十町興津八幡宮：宮舟神事



1. 野地：1993年11月1日



5. 替坂本：1975年（横峰三氏提供）



2. 見付：1994年11月7日



6. 興津：1993年10月15日



3. 志和：1992年10月28日



7. 秋丸：1992年10月23日



4. 若井：1992年11月2日



8. 川奥：1993年9月12日